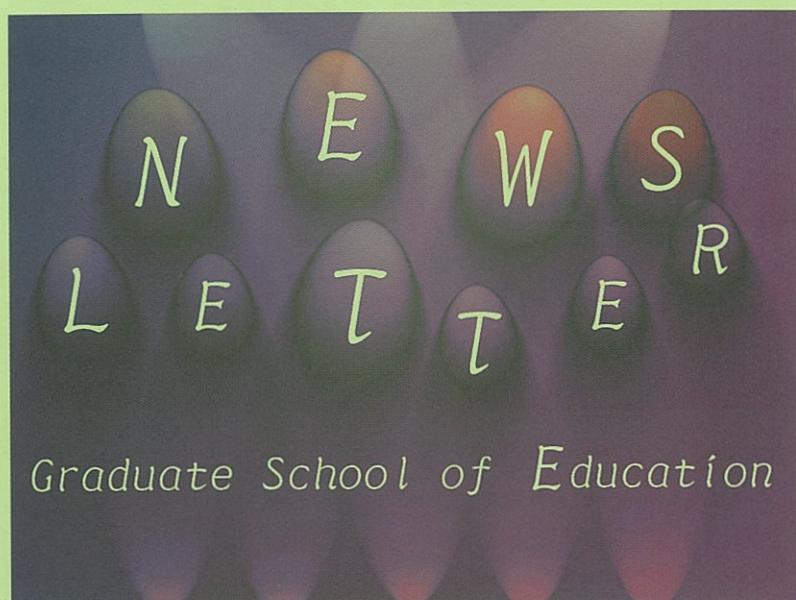


No. 6



(目次)

● 卷頭言

- 夜明け前…希望の朝に向かって………… 研究科長・学部長 東山紘久 ……………… 2

● 研究ノート

- 教官から ……………… 心理臨床学講座 助教授 桑原知子 ……………… 3
院生から ……………… 教育社会学講座D3 高山育子 ……………… 3

● 社会人院生から ……………… 教育科学専攻 専修コースM2 満田育子 ……………… 4 …………… 臨床教育学専攻 第2種M1 森石泰生 ……………… 4

● 事務室より

- お昼の「教育窓口業務」始めました。…………… 庶務掛長 眞継芳春 ……………… 5

● 図書室より

- 図書室からのお知らせ ……………… 図書掛員 吉松伸恵 ……………… 5

センター運営委員

● 臨床教育実践研究センターから ……………… 教育社会学講座 助教授 稲垣恭子 ……………… 6

● 留学生から ……………… 教育学講座D3 嚴 平 ……………… 6

● 諸記録 ……………… 7

- ① 入試結果 ② 学位授与件数 ③ 教育免許状取得状況 ④ 人事異動 ⑤ 科学研究費補助金

● 諸報

- 新任教官、事務官紹介 ……………… 9



卷頭言

夜明け前…希望の朝に向かって…

研究科長 学部長 東山 紘久

ご承知のように来年4月1日より国立大学は法人化されます。国立大学法人法はこの2月末に閣議を通過し、今国会に上程されています。おそらく6月か7月には可決成立すると思います。来年度からは京都大学も国立大学法人法と独立行政法人通則法によって運営されることになります。どのように変わらのかはこれからのことですが、変わることは間違いないところだと思います。

国立大学の法人化は、もともと国家公務員の25%削減宣言から生じたのですが、その底流には社会の変化があります。若年人口の減少、大学進学率がこの50年の間に3%から50%を越えるようになり、大学へ行くことがエリートではなくなっています。大学改革を目指して発足したセンター入試が、大学の差別化と偏差値の輪切り現象をいっそう鮮明にしたことは皮肉な現象ですが。

大きな変化はともかく、われわれの足元にも変化が起こっています。大学や研究所の統合、産学協同による研究開発、寄付講座やCOE等の外部資金の流入と獲得競争、自己点検評価と外部評価の導入、広報活動やオープンスクール、学生サービスの充実、情報開示の範囲の拡大、高度専門職大学院の設置など枚挙に暇がないほどです。

博士の学位授与式は年4回行われていますが、今年度最後の博士の学位授与式が3月24日に体育館で行われ、600名を越す方々に博士の学位が授与されました。一度にこれほど多くの博士の学位が授与されるのも今日的ですが、体育館の二階の傍聴席からよく通る幼児の「お父さん！お父さん！」と階下で学位授与を受ける父親への声かけが、授与式の終わるまで続いていました。それは時には総長のマイクを通した声すらかき消すほどのものでした。入学式の「親連れ」学位授与式の「子連れ」は、今で

は当たり前の現象になっています。そうそう、卒業式でのパフォーマンスも一昔前の高校の卒業式を思い出させるようなものでした。確実に大学を取り巻く雰囲気は内部からも外部からも変化しています。

法人化に向けて、中期目標・中期計画が昨年から起案・策定されてきています。教育学部は、法人化されたときに一層求められる、学生や社会に対する大学の貢献と責任に関する諸計画や改革のみならず、二つの高度専門職大学院構想（教育経営とクリニカルサイコロジー）と二つのセンター（高度専門職大学院生を指導するため）、e教育（遠隔教育）を実施するための設備、老朽化する教育学部棟の新築などを計画しています。これらがどれだけ実現できるかは、現在の国家経済の落ち込みからすると未知数ですが、夢を持ち、希望を絶やさず、現実を吟味しながら、みんなで進めていきたいと思っています。

改革にあたって大切なことは、イメージの変革です。われわれは経験と学習によりイメージや地図を作り、それによって行動しています。古いカーナビゲーションCDを使ってみると、海の上を自分の車が走っているような表示が現れることがあります。新しくできた橋が古い地図にはないからです。地図は現実によって確認できますが、頭の中の地図は思い込むと海の中を走りかねないことが起こる場合があります。先走りすぎても道なき道を進む結果、泥沼にはまり込んだり、現実との齟齬や乖離をきたします。このようにならないためにも関係各位の建設的なご意見やご忠告をお寄せください。

長年かかる醸しだされたうまき酒を、古い革袋を壊すことなく楽しむとともに、夢多き「新しい酒を新しい革袋」に入れて醸成したいものです。夜明け前が一番暗いのですが、その向こうには希望の朝が待っていることを信じて。



心理臨床学講座
助教授 桑原知子

本年度、学部生を対象に「臨床心理学概論」を講義している。そのせいもあって、改めて、臨床心理学や心理療法とはいっていいどんなものなのだろうと考え込んでいる。

まず、「講義」ができるような一般論やマニュアルがあるわけではない。心理療法は極めて個別性が高く、セラピストによって、クライエントによって、また、時期によってすべてが変わってくる。かつ、対応は瞬時に行われる。どんな対応がいいのかという、「一つの」答えがあるわけではない。では、何の法則も技法も存在しないのだろうか？

そうではない。臨床心理学のもう一つの特徴は、個別性と並んで、「深い」普遍性をもつことなのである。このことゆえに、臨床心理学では「事例研究」という方法論が大きな意味をもっている。個別

的であり、一回性をもつ事例でありながら、そこから私たちは多くのものを学ぶ。

最近心理療法は、相談室で行われるような基本的なものに留まらず、学校、医療、司法、産業など、様々な分野で「応用」されている。応用というと、普通基本から離れる方向に行くものだけれど、心理療法の場合、応用できるのはその「本質的」な部分だけのように思われる。例えば、学校現場においては、一般的に心理療法で重要視されるような時間、場所、料金といった枠が保証されないことが多い。そんな中で、自分のやっていることがたしかに「心理療法」であると思えるためには、心理療法がどのようなものであるかということについての「内的な枠」が必要になってくるだろう。

現在多くの大学院生が学校現場に入ってこの問題に直面している。体験していること、苦しんでいることをともに語り考える「学校臨床研究会」に私も参加し、私自身も心理療法の本質とは何なのかを考え続けている。心理療法家としての「自信」をもつことは極めて難しく、絶えず揺らされるのだけれど、こうした基本的な問題を考えている時の院生がとても生き生きしているように見えるのは私だけだろうか？



研究ノート



教育社会学講座D3
高山育子

教育社会学が射程とする範囲は幅広いのですが、近代国家の成立・発展期において教育はどのようなものとみなされ、どのように利用してきたのか、また、教育は社会に対してどのような機能を負ってきたのか、さらに、成熟した時代における教育の社会的機能とは何か、こうしたことを探らかにすることが教育社会学に共通する課題だと言えます。

私は現在、戦後日本の就学前教育、特に幼稚園を研究対象としています。日本の幼稚園制度の起源は意外に古く、近代教育制度の成立期と同時期の明治9年です。けれども、幼稚園には他の学校段階とは異なる特徴がいくつかあります。その1つが、都道府県によって普及状況に著しい差異があるということです。この普及格差は1950年から1960年代にかけて成立し、現在もほぼそのまま維持されてい

ます。また、これまでに行った分析により、この格差には各都道府県の豊かさや施設の設置状況、女性の労働市場や就業意識に加え、教育意識といった要因が関連していることがわかりました。

今の幼稚園は、法制上の規定や成立時の理念よりも、制度として定着した時代の特色が色濃く反映された制度であり、その性格が現在の家族形態の上にも、また人々の人生設計の上にも大きな影響を及ぼしているのではないか、というのが現在の仮説です。

これまで制度の拡大に焦点をあててきましたが、今後はこの仮説を検証するために、各時代において就学前教育がどのように捉えられてきたのか、という問題を取り組んでいきたいと考えています。制度や社会からみた教育と、受ける側から見た教育、この両者のバランスをうまくとりながら、近代日本における幼稚園教育の位置付けやそこにみられる子ども観、学校教育と家庭教育との関連などを明らかにしていきたいと思っています。

教育社会学講座には、国や時代を問わず様々な対象に関心を持った人が集まっています。また、こうした多様な研究活動が可能であることが教育社会学の魅力なのです。

私は、読売新聞大阪本社社会部の記者として教育問題を担当して15年になります。教育というテーマを学問的な見地から深め、専門記者として学校教育や教育政策に対して提言報道を行うことを目標に、昨年、専修コースに入学しました。仕事との両立て通学の時間は限られていますが、研究を取材に、取材を研究に生かせる意義は大きく、また、ゼミで院生や学部生の研究発表を聞き、討論することは、仕事にも大いに刺激になっています。

大学院では、学校管理職の養成プログラムの見直しをテーマに研究を進めています。学校の取材で、かねてから校長たちに元気がないことが気になっていました。多くの校長たちから愚痴を聞きました。「我々校長は、教職員の人事にも、学校予算にも権限がない。今の制度では校長は教委の言いなりで、教職員には反

社会院 院生 から

私は小学校に勤務し、これまでいわゆる『心のあれ』が見られる子どもたちに多く会ってきました。いじめや不登校などの大きな問題だけに限らず、騒がしい、授業中立ち歩く、話しかけても何も答えない、反抗的な態度で臨む、提出物が揃わない等といった、子どもたちに日々起こる問題が年々深刻化しています。これらに対しては保護者と連携を取って対処するのが望ましいことです。しかし、社会状況の悪化などから保護者も不安定な状態にあって、子どもの問題や学校を避けたり、敵視したりといったことが起こっています。世間では基礎学力の向上やエリート育成、教師の評価制度などが騒がれていますが、現場の教師は子どもと保護者の対処に追われ、それに悩みながら指導に当たっているのが実情です。

一方で、子どもや保護者への心理的支援の重要性が大きく認識されるようになり、スクールカウンセラー

が導入されたことは、対応に苦慮する教師にとって革新的な取り組みとなりました。とは言え、全校に常時配置されていないこと等により、制度は十分に活用しきれていません。まだまだこれからも対応の中心は、日常子どもたちに接する教師であり、教師による日々の心理的支援が欠かせないことに変わりはありません。

この反省もあり、国は教育行政を地方分権化し、校長の学校運営の裁量権を拡大する政策を打ち出しました。しかし、現状では校長たちに権限を自由に行使できる力量があるとは言えません。校長はあくまで教育者であり、学校を組織として効率的に「経営」する能力は、今の官製による学校管理職の養成、研修課程の中では養えないからです。そこで、欧米のように、組織マネジメント能力を持つ「経営者」の資質を兼ね備えた学校管理職を養成する新たなプログラムを開発し、管理職や管理職志望者を受け入れる専門職大学院の設立を目指す研究が、教育学や教員養成系の大学で活発化してきました。修士論文ではこうした研究と欧米の先進事例、さらに日本で任用が進む民間出身校長たちの学校経営改革についても調査し、地方分権時代に求められる新しい校長像を探りたいと考えています。

教育科学専攻 専修コースM2
満田 育子



臨床教育学専攻 第2種M1
森石 泰生



が導入されたことは、対応に苦慮する教師にとって革新的な取り組みとなりました。とは言え、全校に常時配置されていないこと等により、制度は十分に活用しきれていません。まだまだこれからも対応の中心は、日常子どもたちに接する教師であり、教師による日々の心理的支援が欠かせないことに変わりはありません。

子どもたちの声に耳を傾け、悩みに向き合っていけばいくほど、情熱や熱意だけでは解決できないことが分かってきました。素人判断で行うカウンセリング行為が大変危険であることも以前から自覚していました。そこで正しい訓練を受け、今後の実践に確かな理論を裏づけていくようにと考え、本研究科に入学しました。ここでは、これまでの経験と実践を踏まえた上で、学校の特性を臨床的な視点から捉え直し、特性を生かした心理的支援を目指して、教師によるスクールカウンセリング理論を研究していきたいと思っています。

お昼の「教務窓口業務」始めました

本研究科・学部におけるお昼の教務窓口業務を本年4月1日より開始いたしました。このことは、学部学生、大学院学生等の昼休み時間と職員の休憩・休息時間がともに12:00～13:00となっていることから、これまで、学生が午前中の授業終了後の昼休みに教務窓口において、諸手続きを行おうとしても窓口も閉まっている状態であった。また、13:00に窓口を再開した時には、午後の授業が始まるというように、お互いすれ違いが生じていた。

これらのこと少しでも解消し、よりよい窓口サービスを行うべく検討を重ねた結果、12:00～13:00の窓口業務を4月より行うこととなった。

窓口業務には、事務室職員全て（図書掛は、昼休みの閲覧窓口の対応を行っている。）が交代制により、その業務に当たっている。まだ、始めて日は浅いが、4月は特に新入学生の諸手続き、在学生の成績証明発行、履修に関する問い合わせなど対応すべくことが連日たくさん生



事務室より

• clerical room •

庶務掛長 真継芳春

じているのが現状である。これらのことから、当面は教務掛の職員と他掛の職員がペアーとなり、窓口業務の経験を積んでいくこととなる。そのため、学生の方々には、時間内のようにスムーには、対応できていないと感じることが多々あると思われますが、そこは何卒対応者の笑顔に免じて、多少のお許しをいただきたく思います。

最後に、この窓口業務を通じて我々職員も、学生の方々と日々接することを楽しみとし、さらに、教職員・学生にとってより良い環境の一助になることを願います。

利用規則が改正されました

今回、図書利用規則が改正になり、図書の貸出冊数・貸出期間が変更されました。変更は以下の通りです。

◇一般貸出

本学部非常勤講師	10冊 / 6ヶ月	→	10冊 / 3ヶ月
本学部大学院生	10冊 / 1ヶ月	→	15冊 / 1ヶ月
本学部学部学生	6冊 / 3週間	→	10冊 / 3週間
本学部修習員	6冊 / 3週間	→	10冊 / 3週間
本学部研究生	3冊 / 3週間	→	5冊 / 3週間
本学部聴講生			
科目等履修生	3冊 / 3週間	→	5冊 / 3週間

◇論文用貸出

本学部大学院生	10冊 / 3ヶ月	→	10冊 / 1ヶ月
本学部学部学生	5冊 / 3ヶ月	→	10冊 / 3週間

(下線部が変更点)

今回の規則変更は、大学院重点化とともに大学院進学者の増加によって院生の図書利用が大幅に増えたことや、平成5年より実施されている「4年一貫教育」によって、それまで（旧）教養部図書館の利用にとどまっていた1・2年生が学部図書室を利用するようになったことなどを踏まえて行われました。

本離れが進む最近の傾向に反して、教育学部（だけかどうかは分かりませんが）の学生は勉強熱心なので、そ



図書室より

• library •

図書掛 吉松伸恵

ういった学生の利用要求に答えるべく貸出冊数を増やしています。

学部図書室といえば、専門的な研究書ばかりで難しく近寄りがたいと思われる方もおられるかと思いますが、決してそういうことはありません。わりと読みやすい本も多く所蔵されており、入門書の類もあります。

どうぞ教育学部図書室を訪れて、自分でおもしろそうだなと思う本を見つけてみてください。そして大いに勉強してください。今回の貸出冊数増の決定がお役に立つことだと思います。

なお今回の規則改正により、貸出期間が短縮されている部分もありますが、貸出冊数増による図書の流動化を踏まえた処置であることをご理解ください。

これからも、利用しやすい図書室を目指して改善していきたいと思いますのでご期待ください。

臨床教育実践研究 センターから

センター運営委員 教育社会学講座
助教授 稲垣 恭子



教育社会学の立場から臨床教育実践センターの兼任教官に加わっています。センターの年間の事業は結構多く、それぞれ早い時期から準備していくことになりますが、今年度で第7回になるリカレント教育講座もテーマやシンポジストの案が固まりつつあります。今年度は、2004年2月14日～15日の2日間で、「学力不振と子どもの心」をテーマとして分科会とシンポジウムを行なう予定になっています。

リカレント教育講座では、ここ数年「『心の教育』を考える」というテーマを継続して掲げ、そのなかで具体的な現象をいくつか取り上げてきました。たとえば、1999

年度は不登校・学級崩壊をめぐる問題、2000年度は不登校や多動・非行問題を「衝動的な子どもたち」という視点から、2001年度は不登校や引きこもりの子どもとその家族への援助について、2002年度は暴力をめぐる問題と教師への支援といったテーマが取り上げられています。学校や子どもの教育問題に直接かかわる現場にいる人たちが多く参加する講座だけに、教育現場で共有されている問題が扱われてきましたが、今年度のテーマである学力不振や基礎学力問題も近年、議論の的になっています。シンポジストには、臨床心理学の専門家に加えて、共同的な学びの場としての学校の再構築という観点から研究されている佐藤学氏（東京大学）に、教育方法学の立場から参加していただく予定です。基礎学力問題や学力不振問題は、個人が直面する課題であると同時に、学校システムや社会システムの問題でもあり、また学校とは何かという基本的な問い合わせとも関連して、多方面からの議論が期待されるところです。私自身にとっても、個人の臨床的事例を通して社会を臨床的にとらえる社会学の方法をリフレクトするいい機会になると思っています。

留学生から

教育学講座D3 厳 平

先輩留学生として努めたいこと



1997年に来日し、日本教育史を専攻しています。眞の日本を理解するために、その内面を構成する国民が、教育を通じていかに作り出されたのか、という問題を考えたかったからです。

あれから6年が経ちました。その間、京大落研〈落語研究会〉に初めての留学生として4年間も在籍しました。しかし留学生活は決して寄席のような楽しいことばかりではありませんでした。誰もが直面している経済の問題はもちろんとしても、研究のほうも四苦八苦の連続でした。

そもそも論文を書いたこともなかった私は、まず論文の書き方から学び始めました。特に教育史の論文を書くには、先行研究を調べるほか、新史料の発見も極めて重要です。そのために日本各地の図書館や資料室へ足を運ぶことは日課のようでした。とはいっても、優れた論文や新史料を発見した時の喜びは、一日の肉体労働を終えた後

のビールよりもはるかに美味玄妙なものでした。

またゼミのほか、他所の研究会にも参加します。とりわけ学会発表前には、多いときには5～6回も発表することがあります。それでも論文作成を目的とすれば、これはオープン戦にすぎません。勝負はまだこれからです。学会誌に載せる論文を書くことの凄まじさは実際に想像を絶するものでした。去年まで学会誌に3回投稿しましたが、3回とも失敗に終わりました。来日まで順風満帆だった私にとっては、この経験は苦渋で、また屈辱的でした。しかし目標達成のためにあきらめずに、こけたその場で立ち上がって再挑戦することしか考えませんでした。6年間の努力が実って、今年になって初めてレフリー付の論文が掲載されました。それをきっかけに2本目、3本目も掲載が決まりました。

私の入学当時は研究室の学生が少なく、先輩からの指導もさほど受けられませんでした。その分、指導教官にご迷惑をおかけしました。だから、少なくとも新しく来られた留学生の心身両面のサポートは、まず私がしっかり努めていきたいと思います。留学生の苦労は、留学生にこそ分かことが多いからです。

だって、教育史研究室を出入りする留学生は最近すごい勢いで増えているんですよ。皆さん、お気づきではありませんか。

諸記録

平成15年度入試結果

・教育学部

日程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	40	138	138	40	62
後期日程	20	137	93	22	
第3年次編入学	10	69	68	10	8

()の数は外国人留学生で内数

・教育学研究科

課程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士 修 士 養 成 教 育 科 學 專 攻 研 究 者 教 育 科 學 專 攻 臨 床 教 育 學 專 攻 臨 床 教 育 學 專 攻 第 2 種 教 育 科 學 專 攻 (専修コース)	18	55(8)	55(8)	37	34
	14	85(2)	85(2)	(5)	(5)
課程 教 育 科 學 專 攻 (専修コース) 臨 床 教 育 學 專 攻 (第2種)	10	40	40	11	10
	若干名	11	11	0	0
博士後期課程編入学	若干名	7(1)	7(1)	1	1

平成14年度学位授与件数

(H15.4.1現在)

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	64
	教育学科	2
	教育社会学科	1
修士	教育科学専攻	20
	臨床教育学専攻	15
博士	課程博士	6
	論文博士	5

教育職員免許状取得状況

平成10年度（1998）

中学校専修免許状	1
中学校1種免許状	11
高等学校専修免許状	1
高等学校1種免許状	13
養護学校1種免許状	1
養護学校2種免許状	1

平成11年度（1999）

中学校専修免許状	—
中学校1種免許状	15
高等学校専修免許状	1
高等学校1種免許状	18
養護学校1種免許状	1
養護学校2種免許状	—

平成12年度（2000）

中学校専修免許状	1
中学校1種免許状	13
高等学校専修免許状	1
高等学校1種免許状	14
養護学校1種免許状	3
養護学校2種免許状	1

平成13年度（2001）

中学校専修免許状	1
中学校1種免許状	8
高等学校専修免許状	1
高等学校1種免許状	13
養護学校1種免許状	2
養護学校2種免許状	—

平成14年度（2002）

中学校専修免許状	—
中学校1種免許状	8
高等学校専修免許状	—
高等学校1種免許状	16
養護学校1種免許状	2
養護学校2種免許状	—

人事異動 (H14.10.02～H15.04.01)

平成15年3月31日付け

皇 紀夫	教授	定年退職
山崎高哉	教授	定年退職
橋弥和秀	助手	九州大学大学院人間環境学 研究院（助教授）へ転任
宮谷 浩	事務長	定年退職
	会計掛	事務補佐員 退職
	会計掛	事務補佐員 退職

平成15年4月1日付け

東山紘久	大学院教育学研究科長 教育学部長
江原武一	評議員

江原武一	(任期 15.04.01～17.03.31)
矢野智司	現代教育基礎学系長

矢野智司	(任期 15.04.01～16.03.31)
藤原勝紀	教育心理学系長

藤原勝紀	(任期 15.04.01～16.03.31)
高見 茂	相関教育システム論系長

高見 茂	(任期 15.04.01～16.03.31)
小野文生	助手（教育学講座）採用

赤沢早人	助手（教育方法学講座）採用
金田茂裕	助手（教育認知心理学講座）採用

薄葉毅史	助手（教育社会学講座）採用
林 美輝	助手（生涯教育学講座）採用

村田宗一	事務長 原子炉実験所より配置換
寺川秀世	教務掛長 学生部へ配置換

津知哲夫	教務掛長 東南アジア研究センター等より配置換
会計掛	事務補佐員 採用
会計掛	事務補佐員 採用

科学研究費補助金

15年度

研究種目	研究題目	研究担当者
基盤B	進路意思法定における認知・感情過程のモデル化	楠見 孝
基盤B	ネパールにおけるマージナルグループの教育様式の政治人類学的研究	前平泰志
基盤B	官民連携による教育行財政改革の新展開に関する国際比較研究	高見 茂
基盤B	かしこい市民を育む経済学教育の展開とその教育心理学的評価	子安増生
基盤B	発達早期における視線および表情理解の発達と障害：社会的参照行動の再検討	遠藤利彦
基盤B	遺伝子診療における心理臨床的援助に関する研究	伊藤良子
基盤B	人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築	山田洋子
基盤C	心理臨床家の養成における「臨床実践指導」に関する開発的研究	藤原勝紀
基盤C	心理療法と癒しの文化を巡る臨床心理学の開発的研究	皆藤 章
基盤C	表情および視線の認知機構に関する実証的研究	吉川左紀子
基盤C	関西地域における高等女学校の校風と女学生文化に関する教育社会学的研究	稻垣恭子
基盤C	アメリカにおける学校図書館蔵書をめぐる裁判事例の総合的研究	川崎良孝
基盤C	スクールリーダー(教育行政官・学校管理者)再教育カリキュラム開発の総合的研究	皇 紀夫
基盤C	日本植民地統治下台湾におけるミッション・スクールの研究	駒込 武
基盤C	教育詩学(ポエティック)による「現場」のテクスト分析－教育を語る言葉の再生－	鈴木晶子
基盤C	児童生徒の潜在的能力開発プログラムとカリキュラム分化に関する国際比較研究	杉本 均
萌芽	痛みの認知・表現・推測に関する認知科学的アプローチ	子安増生
萌芽	「三項関係感情」の実態とその発生メカニズムに関する探索的研究	遠藤利彦
若手B	作動記憶スパン課題の成績を規定する要因の認知心理学的モデル	齊藤 智

諸 報

◆新任教官・事務官・事務補佐員紹介（「」内は本人の抱負）



小野文生 助手
所属講座：教育学講座
専 門：教育哲学
教育思想史

「充実した素晴らしい環境で仕事や研究に取り組めることを大変嬉しく思っています。どうぞよろしくお願いします。」



赤沢早人 助手
所属講座：教育科学専攻教育方法学講座
専 門：教育課程論
社会科教育論

「様々なことが初めてのことだとまどうことが多いですが、一日も早く慣れてていきたいと思います。よろしくお願いします。」



金田茂裕 助手
所属講座：教育認知心理学講座
専 門：教育心理学

「児童の算数学習における難しさと教授効果に関する教育心理学的研究。何卒よろしくお願い申し上げます。」



林 美輝 助手
所属講座：生涯教育学講座
専 門：生涯教育学
人権教育論

「助手としての責任の重さをひしひしと感じております。最大限努力いたしますのでどうかよろしくお願い申し上げます。」



薄葉毅史 助手
所属講座：教育社会学講座
専 門：教育社会学

「最近、学部と大学院の距離が拡がってしまったので、両者の媒介になれればと思っています。一年間よろしくお願いいたします。」



村田宗一 事務長

「原子炉実験所総務課長から参りました。学部勤務は初めてですが、明るく、精一杯頑張る所存です。どうぞよろしくお願いします。」



津知哲夫 教務掛長
所 属 掛：教務掛

「教務掛の事務は、教官と学生に直接
かかるサポートが大部分です。
教官及び学生の皆さん、よろしくお願
いいたします。」

トピックス



教育学部本館禁煙となりました。

本研究科・学部では、教職員・院生協議会・学部自治会の協力を得て、平成15年2月1日より本館内を禁煙といたしました。

なお、消火用灰皿は本館東・西出入口のスロープ前に設置いたしております。

—今後とも、各位のご協力方よろしくお願いいたします。—

編集後記

草木の緑が眼にまぶしい季節になりました。新学期を迎えてからもう2ヶ月が過ぎようとしています。皆様いかがお過ごしですか。

ニュースレター第6号をお届けします。今号では、国立大学法人化の波のなかで本学部／研究科がどんな変身を遂げようとしているかについての学部長／研究科長のお話をはじめ、新しくこちらに入られた教官・事務官・事務補佐員の方々のご紹介や、大学院専修コースで学ぶ社会人の方々の声などを盛り込みました。また、お昼の「教務窓口業務」や教育学部本館禁煙のことなど新しい動きもあります。教育学部／教育学研究科が大きく変わろうとしているこの時期、広報委員会としてはそうした変革に関わる状況をできるだけ早く皆様にお知らせできればと思っております。紙面のさらなる充実に向けて皆様からのご助言を今後もお待ちしています。（S.S 記）

京都大学教育学研究科

・教育学部広報委員会(平成15年4月～)

委員長 高見 茂 教授
(比較教育政策学講座)

委 員 東山 紘久 教授
(教育学研究科長・学部長)

委 員 鈴木 晶子 助教授
(教育学講座)

委 員 齊藤 智 助教授
(教育認知心理学講座)

委 員 村田 宗一 事務長

委 員 真継 芳春 庶務掛長

委 員 津知 哲夫 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部庶務掛

TEL 075(753)3003

表紙デザイン 山田旬子